

想いを綴る

理事長 北岡 賢剛



受章式でスピーチされる北岡理事長
10月18日 パリ市庁舎にて

「しがらきから吹いてくる風」という映画をご存知ですか？

今回は、ドキュメンタリー映画「しがらきから吹いてくる風」(1999年)について書くと思う。

この映画は、障害のある人達が信楽の街で伸びやかに暮らす様子を記録したドキュメンタリー映画である。映画関係者が、一年にわたって「信楽青年寮(障害者支援施設)」に泊まり込んで制作した。当時私は信楽青年寮の主任として勤務していたこともあって、映画の制作とその後の上映運動に深く関わっていた。

信楽町は、15000人の小さな町であったが、151人の障害のある人が47ヶ所の事業所で働いていた。事業所の多くが、家内制の事業所(窯業関係)であったために、彼らは家族の一員のように迎え入れられ、楽しく働いていた。また、地域で暮らす拠点としての「生活ホーム(滋賀県単独の事業)」が、全国に先駆けて4ヶ所あり、その全体像から、「ノーマライゼーション」の一つの姿を見せていた。

お互いの持ち味を認め合いながら共に生きている姿は、映画を観た人達に柔らかな風を感じさせ、優しい気持ちにさせた。そして、共に生きることの必要性を理屈抜きに伝えた。私も職

員として熱心に(?)働く姿が記録されている。髪の毛も多い。

この映画、全国で話題となり、1000回を超える上映会が草の根的に広がって行った。私も学生時代に訪問した施設(100ヶ所ぐらい)に、上映のお願いをする手紙を書き、そういう人達が実行委員会を全国で立ち上げ上映会を開催してくれた。そして、ある年の「全国的障害者関係施設長会議」ではこんな出来事もあった。厚生労働省障害福祉課長の行政説明で、その課長は行政説明を早々に切り上げ、この映画について話し出した。

「ノーマライゼーションという言葉を一千万唱えるよりも、この映画を見て欲しい。そうすれば普通に生きる、ノーマライゼーションという意味が分かるだろう。全国の人達に是非に見て欲しい映画だ。」と。厚生労働省の課長が、そう喋った・・・!!

上映会に併せてシンポジウムが行われることもよくあったが、当事者や家族、首長、行政関係者などもシンポジストとして参加し、それぞれの立場で違う意見を楽しく言い合った。元宮城県知事の浅野史郎さんをはじめ、施設長会議で異例の行政説明をした吉武民樹さん、そして、田中耕太郎さんと、三代の障害福祉課長も上映運動に参加し、6年間の運動(事業)となり、障害がある人が地域で生きることを実現するための課題が、次々とあぶり出されていった。しかし、不思議と会場の雰囲気は楽しくて、いつも笑いが絶えなかった。色んな人が横に繋がって行くことが、そこにいる人達を楽しい気分させていったのだろう。

この時期は、障害者福祉施策が次々に打ち出されていく時代とも偶然にも重なっている。この時期に登場した施策を思い付いたまま挙げてみる。「グループホーム制度」、「相談支援事業」、「障害者のデイサービス事業」、「授産施設の分場方式」、「重症心身障害児・者の通園モデル事業」、「ホームヘルプ事業」などなど、地域生活を支援する様々な制度が数多く登場した。「しがらきから吹いてくる風」を観ることで優しい気持ちになり、横に繋がっていくことが皆を楽しい気分にしたことは、制度作りの後押しをする何らかの役割を担ったのかも知れない。

今年、その「しがらきから吹いてくる風」が、新しい技術を取り入れた副音声や字幕スーバーを付けて、リアフリー版としてリニューアルされることになった。ネットでも配信されるという。携帯電話などなかったし、インターネットも普及していなかった時代の映画が、今の時代にどう向き合うのか楽しみであり、新しい息吹すら感じる。制度は、時代と共に変わって行くが、私が目指す風景はいつもあの映画の中にある。

そして、その風景を創った信楽青年寮の創設者、池田太郎さんが、私に教えてくれた言葉、「私たちの仕事は障害がある人達が街の中に消えていくことを、支えることなのです。」は、ノーマライゼーションという言葉が我が国に紹介される前のことだった。